

Title	“Capacity to Be Alone” に関する質的研究の試み : 小説『フランケンシュタイン』より
Author(s)	野本, 美奈子
Citation	大阪大学教育学年報. 2001, 6, p. 279-288
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12895
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

“Capacity to Be Alone” に関する質的研究の試み

—小説『フランケンシュタイン』より—

野 本 美奈子

【要旨】

本論文は、今まで筆者が行ってきた「ひとりでいられる能力Capacity to Be Alone」(Winnicott, D.W.1958)に関する理論的・統計的研究を、孤独をテーマとする小説『フランケンシュタイン』を通して質的な観点から捉え直し、「ひとりになる」イメージを追う試みである。Capacity to Be Alone概念では、重要な他者の存在が「ひとり」を支えるという逆説性、即ち関係性に基づいた「ひとり」が強調される。このことを本論文における「怪物」に照らしてみるなら、彼が体現する絶望的な孤独、醜悪さ、凶悪さは、フランケンシュタインが真に「ひとり」になるためにはなくてはならない自らの対立物である。彼がそれを自分のものとして統合せず否定し続けたため、怪物(無意識)の自律性が増し、悲劇となったと筆者は考え、怪物が求める関係性に、分裂したものをつなげる役割としての「エロス」を見出した。そして、高度なCapacity to Be Alone、即ち「ひとりになる力」のイメージの一つとして、ある種の特性を備えた自我(逆説、矛盾などを包括し、関係性への方向性をもつ自我)のもつで、自らの中にある恐ろしい闇を受け容れ、その対立物をつなげ統合していくことについて考察した。

1. はじめに

心理療法家を訪れる人々は、それぞれ個別の問題を抱えているため、心理療法は概ね、クライアントその人の生き方や考え方に伴った個別のプロセスを歩んでゆく。よって、ふだん他者や所属などとの関係の中で社会生活を営むことの多い現代の人々であっても、心理療法では「個」「ひとり」に没頭する、ある特殊な対人関係の形態を体験していると言える。人生にかかわる問題に悩むような時にも同じことが言え、人々は他者との比較や世間一般の水準に照らし合わせた答えではない、「その人自身」の答えをみつけ折り合いをつけていく。心理的な危機や人生の変わり目などには、自分の悩みを自分のものとして悩める力、他の人のものでない自分「ひとり」の人生を体現する力が必要とされる。このような観点から、筆者はこれまで“Capacity to Be Alone (一人でいられる能力) (以下CBAと略記)” (Winnicott, D.W. 1958)、即ち「心理的にひとりでいられる力」に関して、その理論的・統計的研究を行ってきた(野本1997, 1999, 2000)。

2. CBA研究の発展—「ひとりでいられること」から「ひとりになること」へ

Winnicottによると、早期幼児期のCBAの獲得に必要な不可欠なのは、重要な他者(たいていは母親)が何もしないでそこにいてくれた経験(Ego-Relatedness)という「逆説的」な条件である。この条件によって、幼児は一人でいても不安にならず、自分の世界に没頭したり遊ぶことができ、物理的にも心理的にも「ひとり」でいることができる。ここでは、ある条件下で「ひとりでいても安心してくつろげる」肯定的な力が強調されている。

筆者は上記の一連の研究で、Winnicottが詳述する早期幼児期のCBAを低次CBA、三者関係確立以降のものを高次CBAと名付け、Winnicottが詳述していない後者に注目した。心理療法場面において、「ひとりでいても安心してくつろげる力」だけでなく、より高度で精巧な力が必要とされることが多いと感じるからである。前項で述べたように、心理的な問題を抱えている場合、人は社会や所属、集団などを通して自分だけではなく、その人自身としての「ひとり」、即ち「個人individual」としての自分を問うことが多い。individualはこれ以上分けられない(not divide)ことを指し、低次・高次CBAともに、「これ以上分

けられないひとり」を意味する。だが、低次CBAでは、母親と一体となっている状態や自他が未分化な状態から「一」単位の自分になれることが強調され、高次CBAでは、自分の中の相反する気持ちや苦しみを包括し、なお、自分らしく、また自分にしかない生き方を探していくという意味での「一」となる必要があり、かなり高度な能力であると考えられる。

そこで筆者は、低次CBAの概念を基礎に、青年期以降の人へ自由記述および文章完成法調査を行い、高次CBAの定義を「①アンビヴァレントに耐えながら自分の悩みを自分で悩める力 ②自分自身の「個」を感じながらそれとともに生きていく力 ③自分らしい生き方を体現していく力」とした(野本 1999)。しかし、この定義を臨床的に応用するために、イメージを広げ深める必要性を感じている。

また、Ego-Relatednessから見出される新たな観点が臨床心理学的に有用であると考えた。それは簡潔に述べるなら以下のように集約される。低次CBAでは、「ひとり」でいることは「誰かがいること」を暗に意味しているが、それは情緒発達に伴って、時空間を超えた両者の関係性にあるあいだの世界(中間領域)、「誰でもないものがあること」を体験できることに発展する、ということである。中間領域については他で述べたので(野本 2000)ここでは詳しく述べないが、筆者が人々の人生の転機における高次CBAを重要だと考えるのは、例えば「独立」「自立」ということばを使用すると、「ひとり」の裏にはいつも「つながり」や「中間領域」がある、という逆説性が欠落してしまう恐れがあり、その領域の存在が、人々が悩みに自分らしい折り合いをみつけていく際に不可欠であると考えられるからである。

さらに、高次CBAでは「ひとり」で「いる」だけではなく「ひとり」に「なる」という能動的な力も問われるだろう。低次CBAは環境に支えられることである程度獲得されるが、高次CBAの場合は、高次CBAの定義にも表れているように、自分が「ひとり」であることを受け容れ、「ひとり」と向き合わねばならない強い自我が必要とされる。この力はクライアントの来談意思ともつながっているとと言える。

本論文では、上述したCBA(ひとりでいられる能力)概念の特性が重要だと考え、「個」「個人」という語を比較的使わず、平仮名で「ひとり」と記述し、低次CBAを「ひとりである(いられる)」、高次CBAを「ひとりになる」と表現する。そして、能動的に「ひとりになる」ためには、他者、この世、自分自身の心の見えない部分といった領域から隔離されることなく、そしてそうした部分を分裂・分割することなく、有機的にそれとつながっていくことが必要不可欠なのではないか、という観点からCBAの質的研究を進めたいと思う。

3. フランケンシュタインと「ひとりになること」-ある臨床事例からのインスピレーション-

本研究で『フランケンシュタイン』をとりあげるのは、ある臨床事例で分裂病質のクライアントに筆者がもったイメージを契機としている(野本 1998)。対人関係の問題を主訴として来談したそのクライアントは、筆者と会う時以外は、物理的にも心理的にも全く孤独な生活をしていて、人といっても決して心は交わらないで水と油のように弾き合う、と語り、筆者とも情緒的に深い結びつきをもったかのように見えながらも、その関係は断片的で、真につながりすることは困難を極めた。そのクライアントは物理的に「ひとりである」ことはできたが(実はひとりであることに大きな不安を抱えていると思われたが、少なくとも孤独を選ぶことができた)、「ひとりになる」ことは決してできないと筆者は感じた。それが安心できる孤独でもその人らしく生きる孤独でもない、強固で隔絶的な孤独であったからである。が、一方で、関係性を切に求めようとする無意識の力が見え隠れし、そうした姿が『フランケンシュタイン』に登場する「怪物」の姿に不思議なほどに重なった。事例については詳しく述べないが、筆者はその事例から「ひとり」のこころの中で対立するものを統合していく力、能動的に「ひとりになる力」に関心をもった。

「フランケンシュタインFRANKENSTEIN; OR, THE MODERN PROMETHEUS」は、1831年、Shelley, M.によって書かれた怪奇小説である。この小説は長年にわたって数多く劇化され、映画(ホラー映画、パロディなど)化されて、人々の心の中に孤独な「怪物」のイメージを強く残している点において、神話的な小説であると筆者は考えている。なお、原作のもつこのような神話的な力については、原作の作品分析の後で述べようと思う。

4. 原作『フランケンシュタイン』あらすじ

18世紀のスイス。ヴィクター・フランケンシュタインはジュネーブの名門の生まれで、情愛深い両親と、妹同然に育った許嫁、弟、親友とともに、恵まれた環境の中、感性豊かで知識欲旺盛に育つ。大学に留学したフランケンシュタインは、最も進んだ自然科学の知識を習得しながら、生命の神秘に心を奪われてゆく。生理学や解剖学を熱心に研究し、ついに生命の因を発見する。無生物に生命を吹きこむことができると知ったフランケンシュタインは、愉悦と歓喜に浸り昂揚する。そして独房のような実験室にこもって、二年の歳月をかけ、納骨堂から骨を集め、解剖室から各器官を集め、血管や筋が透けて見える黄色い皮膚の巨体、人造人間を創造するのである。

だが完成したその瞬間、彼は、生を受けた怪物のおぞましい容姿を見て「息も止まる恐怖と嫌悪」で一杯になり、部屋を飛び出してしまう。帰ると怪物はいなくなっていたが、数ヶ月、極度の衰弱と恐怖で熱病にうなされる。ようやく回復した頃、弟が惨殺されたと知らされ、実家に戻る。召使いが無実の罪で処刑されるなか、フランケンシュタインただ一人が、それを怪物のしわざだと知っている。絶望と悔恨に打ちひしがれ、自分の罪深さを愛する家族に知られたくないために孤独に沈む日々のなか、ふと旅に出て、突然、怪物と出会う。怒りと憎悪にかられたフランケンシュタインが怪物を激しく罵り、「失せろ」と言い放つと、怪物は彼に善意と哀れみを乞う。彼は怒りを感じながらも、被造物に対する自分の義務を認め、怪物の話を書くことにする。

怪物は、実験室を出て森をさまよった「生涯の初期の頃」から語り始めた。怪物は、飢えを感じて森をさまよいて、人家に入って食物を食べるが、容貌の醜悪さのために、人間たちに泣き叫ばれたり、攻撃されたりして、傷つき逃げ惑う。やがて、盲の老人とその娘、若者が住む小さな家のそばの小屋に隠れ住み、壁の穴から家族のだんらんをそっと盗み見るようになる。そうしてことばを独学し、家族の愛情や思いやりに心動かされつつ感情を学び、本から人間の歴史も学ぶようになる。しかし、学べば学ぶほど自分に仲間がないことを思い知るのであった。ある日、怪物は上着のポケットに、フランケンシュタインの怪物創造の過程を記した日記があるのに気づき、創造主までもが己の存在を忌まわしいと思っていることを知り、絶望する。それでも怪物は、彼が愛する隣の家の家族たちなら自分を受け入れてくれるだろうと希望を抱き、意を決して盲の老人に近づく。だがやはり娘や息子は、気絶したり、棒切れで叩いたりし、翌日には家から逃げてしまった。「自分をはねつけ見捨てていった」激しい怒りと、彼らを愛する気持ちの狭間で苦しみ、絶望と狂気にとりつかれた怪物は、その小屋に火を放ち、創り主の故郷ジュネーブを目指す。怪物は、森で出会ったフランケンシュタインの弟が復讐を誓った自分の創造主の一族であると知り、「最初の生贄」として殺した。

と、話し終えた後で怪物は伴侶を作るようフランケンシュタインに要求する。フランケンシュタインは、しぶしぶ約束するが、忌まわしい創造の過程を思い出すと仕事はなかなか進まない。ようやく完成というところで、怪物の子孫が繁栄することを恐れ、怪物の目の前で怪物の伴侶をひきちぎった。怪物はその復讐に、フランケンシュタインの親友を殺し、結婚式の初夜に彼の妻を殺す。その知らせを聞いた彼の父も死んでしまう。

全てを失ったフランケンシュタインは、怪物を殺すために地の果てまで追いかける旅に出る。長旅で衰弱した彼は、北極探検途上の航海船の船長に助けられ、今までの身の上を語ることになる。そして、歴史に名を残したいというかつて自分もった思いをもつ船長が、自らの罪と同じ事を繰り返さないように、と警告して死んでゆく。怪物は彼の屍の前に現れ、嘆き悲しむ。そして氷の地に薪を積み上げて火を放ち、その炎で自殺すると告げ、北極海の闇の中へと消えていく。

5. 作品分析

この小説は、全体に流れるフランケンシュタイン、怪物、北極探検途上の船長の三者のもつ孤独のテーマや、科学者の責任問題、知識を得ることに関する主題、三人の対応関係とドッペルゲンガーなどについて分析されることが多いようである（新藤1984）。また、Shelly, M.の家族背景やテキストの分析などから

のアプローチ、哲学的な分析もされている (Lecerle, J-J. 1997)。しかし文学的・哲学的な分析は他に譲り、筆者は、精神分析やユング心理学の概念を借りながら、この小説を、「ひとりになる」ことを主題とする、ある種の神話として読もうと思う。そして怪物の「生」の背景にあるもの、「怪物」の何層にも重なる孤独とその意味を通して、真に「ひとりになること」のイメージを追ってゆきたい。

5-1 怪物創造前のフランケンシュタインという人物

フランケンシュタインはキリスト教文化、近代科学の栄光といった、「光」を象徴する人物として描かれている。勇気と慈愛に満ちあふれた人格の彼は、家族に愛され守られている。青年としての聡明さと探求心、美しさを兼ね備え、また、名門フランケンシュタイン家を長男として継承すべく、将来を期待されている。彼はあたかも順風満帆の人生を歩んでゆくように見える。

それでは、フランケンシュタインはなぜ怪物を造る必要があったのだろうか。これは科学の限界へ挑戦する科学者の狂気にすぎないのだろうか。確かに彼は、近代科学の講義に感動して、「新しい道を拓き、知られざる力を探してやろう。創造のもっとも深い神秘を世界に解き明かしてみせるのだ」(p.63)と決意している。しかし心理学的に考察するなら、これは彼が内的に大きな転換点を迎えたこと、新たに「ひとり」の人として生きるために自然発生する内的な動きの現れであると捉えることができる。彼の決意からも読みとれるように、ここで主題となるのは「古い世界の破壊」である。古い世界とは、フランケンシュタイン個人の次元では「父の息子としての自分」であり、集合的な次元では「キリスト教文化における神、秩序」である。

彼は、父親が彼を一人前にするための仕上げとして用意した単身留学に、何の疑問もなく従っている(但し、出発直前に猩紅熱で最愛の母親を亡くし出発を延ばしているが)。妹同然に育った許嫁も実家で彼との結婚を待っている。だが実は、彼は夢中になっていた錬金術の本を読むのを父に否定され、母の死も満足のいくまで受け入れられないでおり、欲求不満で抑圧されている自分を隠し持っている。彼の無意識は、一人前になる時にさえ父親の手の中でしか動けない自分を感じ取っているのである。彼が一人前の男性として生きるには、内的に父を殺し、自ら伴侶を見つけ、新たな世代の主となる必要があるのだが、彼が選んだのは、歪んだ形で母親と結合すること、即ち、不当な手段で新たな「生」をつくることであった。そうして彼は、父に逆らえない無力な自分と向かい合うことを巧妙に避けたのである。

また、彼が突き動かされた「さからいぬ狂乱にも近い衝動」は、“ヒュプリス”(無知による倨傲)として、集合的な次元で彼を動かすものでもある。神が与えた秩序に対し、人間たちは知らぬ間に犯罪を犯す。ここでこの小説の副題『あるいは、現代のプロメテウス』の意味が現れる。ギリシャ神話の神、プロメテウスは「先見の明」という意味の名の火の神であり、神から火を盗んで人類に与えてゼウスの怒りを持った。プロメテウスは人類に火を与え闇を葬り去ることが善であると考え、神と同等の座に着こうとしているという点で、フランケンシュタインと重なる。「その境(注:生と死の世界)を初めて破る人となり、この暗い世界に光の滝をふらせよう。新しい種はわたしを創り主、みなもとと讃え、あまたのすぐれた幸せ者たちがこのわたしから生を受ける。わたしが彼らから受けるべき感謝は、世の父親が子に要求するよりもさらに完璧なものだ」(p.70)と彼は考えている。人々は近代科学の恩恵を受け様々な発見をしてきたが、同時にそれによって、環境破壊や秩序の混乱などの負の側面を背負わざるを得なくなった。自らの力で、世界が「光の滝」で満たされ、幸せ者たちで世界が埋め尽くされるという彼の万能的な夢想は、近代科学主義全体に共通するヒュプリスでもある。

このように個人的無意識ばかりでなく、集合的な次元からも解釈しうる誇大妄想的・全能的な幻想は、彼の不断の努力によって着々と進められ、完成に近づく。しかし彼は、「生」の創造という偉業を成し遂げる才能を正しく生かすことはできなかった。創造のその瞬間まで、その幻想が一面的で独善的であること、それがもたらす恐怖の結果に思い至らなかった。二年の孤独は、あくまでも他者から一父や神から「逃れる」「隠れる」ための孤独であり、葛藤の回避である。

今まで生きてこなかったもう一人の自分は、新たな生き方を選択しなければならぬ時に水面下から現れ、運命的にその人に決断を迫る。「光」を象徴する人物として描かれたフランケンシュタインの「影」

は、小説の行間に沈む彼の陰鬱で恐ろしい面であり、近代科学の弊害の側面である。フランケンシュタインの無意識の対立の構図は、「古い世界」と「新しい世界」、「意識」と「無意識」、「美」と「醜」、「親」と「子」、「平凡な幸福」と「真理の探究」などと言うことができるだろう。彼の心理的問題は、心の中にこのような対立があることそのものではなく、それらから生ずる葛藤を避けようとする力動である。怪物の身体が、死体の寄せ集め、つぎはぎであることは、フランケンシュタインの心の中が二項対立のまま解消されない分裂状態であることを象徴的に表している。そしてこの葛藤の回避は、もちろん怪物の人格に大きな影響を及ぼす。

フランケンシュタインは、長い労苦の末やっと完成された人造人間が生命をもった途端、隠れていたもう一人の自分のあまりの醜悪さに嫌悪し、その場から逃げ出してしまふ。彼の自我が偏り、もう一人の自分と向き合うことができないのは、怪物を創造した後、長い間熱病にうなされてしまうことにも表れている。「ひとりになる」ことは、逃れられない運命に向き合い、矛盾や逆説に満ちた世界に開かれた自我の力が必要とされる。彼の自我は、「影」の部分を分裂し排除する生き方を選択したが、そうした力が強ければ強いほど、彼の本来の「ひとり」が必要としている無意識（怪物）の力は強大になり、自律性を増し、コントロールができなくなっていくのである。

5-2 増長された怪物の孤独

前項で述べたように、怪物が生まれた経緯には、フランケンシュタインの個人的無意識、集合的無意識の大きな流れが布置されている。よって怪物には、フランケンシュタインが抑圧したものが増長した形で現れている。本項では、その中でも多層に重なる怪物の孤独に焦点を当てて、考察していく。

怪物の独白は、生まれたばかりでまだ感覚の統合されていない怪物が、たった一人で捨て置かれている状況から始まる。「目をさますと暗かった。おまけに寒いし、いわば本能というのだろう、ひとりぼっちでいることになかおびえてもいた。あんたの部屋を出る前に、寒さの感覚があったので少しの衣服で体をおおってきたが、それだけでは夜露から身を守るには足りなかった。自分は哀れな、よるべのない、みじめな生き物だった。わかるもの、区別できるものは何もなく、ただ四方八方から苦痛がせめてくるのを感じて、坐りこみ、そして泣いた」(p.138)。人は誰しも「ひとり」で生まれてくるので、心理学的にはこの原初的・感覚的な孤独は人間の本質的で実存的な孤独であると言える。その孤独は発達にしたがって知的な理解はされるが、本来はこうした原始的な感覚である。自分に何が起きているのかわからないのはおろか、自分とそうでないものの区別さえない、「想像を絶する不安Unthinkable Anxiety」(Winnicott 1962)の絶壁の上に立っている感覚である。それでも人間が「ひとりでいられる」のは、自分の存在をこの世につなぎとめる何かがあるためである。前に述べたように、CBA概念では、そのもっとも基本的な形がEgo-Relatednessという（母親との）特殊な関係性である。しかし怪物は、このような「想像を絶する不安」から逃れられない存在として生を受ける。

怪物は飢えと興味から村に入って、人々から激しく攻撃される。そうして逃げ込んだ小屋からある家庭を覗き見て、人間の感情に初めて触れる。「その優しさと愛を見て、自分は一種奇妙な激しい感動を覚えたものだ。苦痛と喜びのまじりあったその気持は、飢えや寒さ、暖かさや食べものからも、いまだ味わったことのないものだった」(p.144)。彼らは貧乏と飢えで不幸だったが、怪物は彼らを慕って陰から助け、「彼らが不幸になると自分もしょげこみ、嬉しいときは自分とともに喜んだ」(p.149)。彼は人間の感情に共感ができるようである。だがそれは壁の穴を通じてでしかなく、一方的な憧れで交流はないので「幸福はいたるところに見えるのに、自分ひとり閉めだされてどうにもできない」(p.134)と感じている。怪物は、村人から迫害された時には感じなかった疎外感を感じている。重要な他者といっても孤独だと感じることは、いない時の孤独感より厳しく辛いものである。

次に怪物は、水面に映った自分の容貌の醜悪さに気付く。「この自分の姿を透明な池のなかに見たときの恐ろしさは！ 一瞬自分はぎくりと身をひいた。鏡に映ったのが本当にわが身であるとは信じられなかったのだ。そして自分が現実にとおりの怪物であると納得するにいたったときには、落胆と屈辱のいがい思いがこみあげてきた」(p.151)。「誰に頼ることもなく、誰ともつながりを持っていない。…世を去

ったとて悲しむ者はひとりもない。風采はおぞましく、体は馬鹿でかい。これはどういうことなのだ。自分は誰だ？ 何者なのだ？ どこから来たのだ？ 自分の運命は何なのだ？」(p.168)。心の美しさを自分のものとして育ててきた怪物は、身体の醜悪さを受け入れるのに強い抵抗を感じている。ここで注目すべきなのは、フランケンシュタインが目をそらし逃げ出してしまった自分の醜悪さが、怪物には自らの「形」「身体」として現れたために、否定できなかったことである。自分は誰だ、何者だ、という問いは、人々のところに生き続ける永遠の問いであり、それを探す道中には恐ろしく邪悪な自分が見える時もあるだろう。フランケンシュタインが完全に避けた課題を怪物は自ら体現させられ、心を分裂させ、良い心と邪悪な心を持ちつつ生き続けるのである。

そして最後に怪物が出会う孤独は、「見捨てられた孤独」である。「『この身が生を受けたその日が憎い！』苦しさのあまりにおれは叫んだ。『呪われた創り主よ！ おまえまでがむかつて顔をそむける、そんなおぞましい怪物を、なにゆえに創り出したのだ？』」(p.171)、「おれの創り主はどこにいる？ 彼はおれを捨てたのだ」(p.172)。親に見捨てられた孤独は、親に対する愛情を隠してあまりあるほどの憎しみを増幅していく。愛していた隣の家の家族にも見捨てられ、燃える怒りは、放火の炎となり、狂気に乗り移られた殺人鬼となる。

このように、「実存的孤独」、「疎外感」、「心の分裂」、「見捨てられ」などの苦しみを、怪物は増長された形で経験している。「実存的孤独」は、よるべなさ、頼りなさ、崩壊感を、「疎外感」は、いわゆる孤独感、まなざしのなさを、「分裂」は、自分自身を攻撃し心を分裂させる病的な怒りを、「見捨てられ」は、深い哀しみと絶望と迫害される恐怖を怪物につきつける。

だがこうした孤独は、本来フランケンシュタインが感じるべき彼のもう一つの側面である。ところが彼は、「このわたしほど幸せな子供時代をおくった人間もいない」(p.49)と語り、両親、家族、友人に囲まれ、孤独を感じたことなどないと言わんばかりである。果たして本当にそうであろうか。捨て子が突然養女として迎えられ自分の妹と決められた時、彼は怒りや疎外感、見捨てられを感じなかつたであろうか。母親が死んだ時、自らの死、実存的な孤独を感じてよるべなさを感じなかつたであろうか。自分の人生の新たな段階に向き合った時、自分自身の「ひとり」を創造していくための孤独で苦しい道程を垣間見なかつたであろうか。否、彼はそうした闇を否定し続け生きてきたのである。

5-3 怪物の「生」の意味—フランケンシュタインに欠けていたもの

筆者は、フランケンシュタインが本当の「ひとり」となれず、分裂したつぎはぎの「孤」として生きざるをえなかつたことが、この小説の悲劇のテーマであると考え。心の対立から目をそらすことで生き残ろうとした彼は、逆に、自らが生み出したもう一人の自分から猛烈な逆襲を受けることになる。

怪物は、多層に重なる孤独に苦しみながらも、フランケンシュタインに関係性を求めずにはられない。その関係性への執念は、怒りや恨みの姿で表れ、一見醜く恐ろしいため、フランケンシュタインは受け容れることができないようである。しかし、その関係性とそれを求める力動こそフランケンシュタインに欠けていたものであり、怪物（無意識）は、それをフランケンシュタイン（意識）に示すために生まれてきたと筆者は考える。例えば、怪物がフランケンシュタインにたった一つだけ要求したことは、自分と暮らす女の怪物を創造することであった。肉片の寄せ集めである怪物は、そのばらばらでつぎはぎの自分の姿に象徴される、自分の「生」にとって最も必要なものを知っているかのようなのである。それは「つながること」であり「二者の世界」である。

その「関係性」は、ユング派のことばを借りるなら「切り離されてばらばらになったものをひとつに結びつける力」（武野 1994）であるところの「エロス」であるとも言える。「エロス」は「ロゴス」とともに、人間の基本的な生命原理であり、「エロス」は関係を結ぶことを中核とする女性原理であるとされるものである。「ロゴス」は分離し切断するという機能をもつ男性原理である。フランケンシュタインは、死体を切り刻んでつぎはぎにしたことに見られるように、自分の心の闇を分断していくことを得意とし、そうして理性的に生きようとしたが、反面、「さからいえぬ衝動」に突き動かされて過ちを犯し、怪物が求める対話や関係性には未熟で無責任な態度である。彼の感情を動かすのは、美しい家族の間で生まれて

きた愛情やあたたかさといった、エロスの一面にすぎない。しかし、エロスでつなぎ結びつける力は、醜く非合理的な側面も含み、まさに怪物はその役割を体現し彼に訴えかけている。怪物は、もう一人のフランケンシュタインであるだけでなく、彼が全体性に向かいバランスのとれた「ひとりになる」ための力動そのもの、その能動的な力であると言える。

よって、怪物が結合すべき相手は、女の怪物ではなくフランケンシュタインであり、怪物もそれを知っている。怪物はフランケンシュタインの死に「彼を殺しておれの罪は完成された、このみじめな生もやっと終わりにたどりついたのだ！ おお、フランケンシュタイン！ 寛容と献身の人よ！ 今さら赦しを請うて何になる？ …ああ！ もう冷たい、答えてはくれない」（p.291）と言って亡骸に涙を流し、同じ死の世界へ彼を追う。フランケンシュタインの亡骸の前に、もはや怪物の「生」の意味がなくなってしまうのは当然である。怪物はフランケンシュタインの「ひとり」にとってかけがえのないものである、と同時に怪物にとっても逆が言える。フランケンシュタインの最後の旅は、自らの片割れを殺す旅であり、怪物にとっては、対話や結合を求める旅であった。

ここで筆者は、CBA概念の逆説性にもう一度立ち返って考察したい。誰かがいるから一人になれる、という逆説は、まさに関係性（エロス）を示している。低次CBAで母親から与えられるのは、あたたかい世話や養育的な雰囲気であり、それが不安を解消し、自我を育てていく。高次CBAでは、自らの中にある相容れないもの、恐怖、醜さが現れた時に、能動的につなげ統合していく力が必要とされている。低次CBAも高次CBAも広い意味で「関係性（エロス）」が必要不可欠であるという点で共通している。しかし、高次CBAにおける関係性の方が、より、エロスの質が問われる高度なものと言えるだろう。この点についてはさらに多くの素材を用いた考察が必要であると考え、今回は触れるにとどめておく。

筆者が出会ったクライアントが、二者のあいだの世界を分断し、頑なに自分の世界を守ろうとしたのは、つなげる機能をもつエロスに対して感じる脅威のためであろう。しかし、筆者はクライアントの孤独の底に確かにエロスが息づいていると感じていた。筆者の長期休暇の後の再会で、クライアントは初めて涙を流し、捨て置かれていた寂しさと苦しみを見せたからである。「つながり」のなくなった「孤」にとって、「つながり」を求める他者や自分の無意識は、「怪物」のように破壊的で残虐で自分を脅かす恐ろしい存在に見えることだろう。しかし、無意識の「怪物」はこうした形で人間の中に常に息づき、訴えかけているのではなかろうか。心に棲む怪物の存在は、特に分断された「孤」の中で生きる人間にとって、意味深く大切なものであると筆者は考える。

6. 人々の心に生きる怪物性 - 『フランケンシュタイン』の神話的な力

この物語は、劇化され、何度も映画化されていくうち¹⁾、原作よりそれらのイメージが一般に伝わるようになり、今や、数多くのホラー映画、SFに影響を与えた古典として認知され、「怪物」のイメージは世界共通のものとなっていると言える。「フランケンシュタイン」の名を知らない人はほとんどいないが、それが怪物の名だと思っている人も多い。しかし、『フランケンシュタイン』が原作を離れ、「モンスター」の象徴として人々の心を捉える力をもっていることそのものが考察に値するのではないかと筆者は考える。

フランケンシュタインが怪物の名として知られるようになったのは、人間の心の影が一つの人格として生きること、影（無意識）の強大な力が実体（意識）をいつでも呑み込んでしまうこと、それが人々の心に強く印象づけられたことが一つの理由として考えられる。しかし、もし怪物が単に「悪」の権化であれば、これほど長きに渡り、人々の心を捉えることはなかったかもしれない。怪物は、神とも悪魔ともつかない、その狭間に漂う「何ものでもないもの」という超越的で神秘的な性質をもち、崇高さをも感じさせる。

クライアントの「ひとり」の語りや「孤立した一の話」「あくまで個人的な物語」として語られる時、それは自己中心的で独善的な、場合によっては妄想的な様相を帯びてしまう場合があるだろう。個人によって創作され意図的に作られた物語は、あくまでも個人的で一面的なものである。「ひとり」は隔離され

見捨てられた「ひとり」となる危険性と常に隣り合わせにある。しかし、この小説が語り継がれ、200年近くも人々の心に生き続けたのは、超個人的な、大いなる世界によって支えられた無限の広がりや深さをもつ「怪物」が、人々の「ひとりになる」という心的体験のプロセスの本質的な中核部分と対応しているからではないだろうか。

プロメテウスの罪は、「暗闇」即ち「魔」の棲むところに火を与えた罪である。暗闇を照らし出すことは、「魔」を殺す独善的な行為でもあるのである。フランケンシュタインは怪物の子孫が繁栄することを恐れていたが、これは即ち、魔が無限大に広がっていくことを怖れることであり、怪物（魔）が生み出す多様性を信じるができないことである。真に「ひとりになる」ためには、何ものでもないもの、魔を信頼し、その世界を自分とつなげていかねばならないのではないだろうか。横山（1999）は、「人間の普遍的無意識の宿る超越性を帯びた破壊性や「魔」というものは決して否定され放逐されてしまうものではなくて、悲しいことだけれどもどこかで受け入れざるをえない、受け入れていかなければならない存在としてある」と述べる。すべてが明るみに出されるという危険は、近代科学だけでなく人の心にも言えることなのではなかろうか。この小説が形を変えつつも生き続けているのは、人々がそうした「魔」の存在をどこかで持ち続けようとしているからではなかろうか。

7. おわりに

筆者は、あるクライアントのイメージから『フランケンシュタイン』の分析を思い立ったが、この小説から得られる「孤独」のイメージは、自分自身の人生を通して自分の「ひとり」を探す苦しみ、人生の危機でたったひとりの自分に向かい合うクライアントに寄り添うために、少し役立つように筆者には思われる。しかし「ひとりになること」をめぐるイメージは、その性質ゆえに多様である。本論文では、そのイメージを、自らの中の恐ろしいものを客観的な代用物に移し替えることなく、何ものでもない世界とつながることのできる自我をもって能動的に統合していくことを鍵として述べてきた。CBAが英国の概念であるため、英国のイメージが親和的だったのか、今回は英国の小説をとりあげたが、今後の研究では、この概念を日本の神話からイメージをとりあげ、日本人の心性の中に息づく「ひとりになること」「ひとりを抱えて生きる力」として研究していきたいと考えている。

<注>

- 1) “Frankenstein” 1910, “Life Without Soul” 1915, “Il Mostro di Frankenstein” 1920, “FRANKENSTEIN” 1931, “Son of Frankenstein” 1939, “Abbott and Costello Meet Frankenstein” 1948, “THE CURSE OF FRANKENSTEIN” 1957, “Young Frankenstein” 1974, “Flesh for Frankenstein” 1974, “Frankenstein 90” 1984, “The Bride” 1985, “Frankenstein Unbound” 1990, “Frankenstein” 1994など

<参考文献>

- Arthur Cotterell 1986 A Dictionary of World Mythology (New Edition) Oxford University Press
 左近司祥子他訳 「世界神話辞典」 柏書房 1999
 堀出稔 1993 「『フランケンシュタイン』における疎外観」
 名古屋女子大学紀要 人文・社会編39 pp.291-295
 呉茂一 1979 「ギリシア神話（上）」新潮文庫
 Lecerclé, J-J. FRANKENSTEIN, MYTHE ET PHILOSOPHIE Collection PHILOSOPHIES
 今村仁司・澤里岳史訳 「現代思想で読むフランケンシュタイン」講談社文庫メチエ 1997
 目幸黙僊 1984 「ユング心理学と“一”の世界」
 河合隼雄・樋口和彦・小川捷之編『ユング心理学 東と西の出会い』pp.1-38 新曜社 1988
 中野弘美 1996 「『フランケンシュタイン』あるいは異者の語り」

- 横浜国立大学人文紀要第2類 語学・文学 (43) pp.39-47
- 野本美奈子 1997 「Capacity to Be Aloneに関する基礎的研究」
大阪大学大学院人間科学研究科修士論文 (未公刊)
- 野本美奈子 1998 「『外向性の欠落』を主訴として来談した男性との面接過程」
大阪大学人間科学部心理教育相談室紀要4 pp.88-97
- 野本美奈子 2000 「Capacity to Be Aloneの逆説性と多重性に関する研究」
大阪大学教育学年報5 pp.125-137
- Shelly, M. 1831 FRANKENSTEIN; OR, THE MODERN PROMETHEUS
森下弓子訳『フランケンシュタイン』創元推理文庫 1993
- 新藤純子 1984 「『フランケンシュタイン』の過去・現在・未来」
森下弓子訳『フランケンシュタイン』pp.298-323 創元推理文庫 1993
- 曾野綾子・田名部昭 1990 「ギリシアの神々」講談社文庫
- 武野俊弥 1994 「分裂病の神話 ユング心理学から見た分裂病の世界」新曜社
- Winnicott, D.W. 1958 “The Capacity to Be Alone” International Journal of Psycho Analysis 39
牛島定信訳『情緒発達の精神分析理論』pp.416-420岩崎学術出版社 1977
- Winnicott, D.W. 1962 “Ego Integration in Child Development”
牛島定信訳『情緒発達の精神分析理論』pp.57-66 岩崎学術出版社 1977
- 横山博 1999 「普遍的無意識の視点からの『魔』」ブシケー 18 pp.22-42

A Qualitative Study about “Capacity to Be Alone” – from the novel “Frankenstein” .

NOMOTO, Minako

The purposes of this paper are to inquire the image of becoming “alone” and to examine theoretical and statistical studies about “Capacity to Be Alone” (Winnicott, D.W.1958), from the qualitative viewpoint using the novel “Frankenstein” , the subject of which is loneliness.

In “Capacity to Be Alone” concept, the paradox that the significant person supports “a baby being able to be alone” is emphasized. When applying this idea to “the monster” of this paper, his hopeless solitude, ugliness, and brutality are the very entities that are necessary for Frankenstein to become truly “alone” .

I think that the autonomy of the monster (unconscious) increased and that this novel became a tragedy because he didn't integrate it and continued to deny it. Also, I think that the relation, which the monster requires, is “Eros” which unites splitting one. And it is considered that the one of image of highly sophisticated “Capacity to Be Alone” can accept fearful darkness in it and unite opposing entities by Eros with the kind of Ego which has the direction to relation and including paradox and contradiction.